

センター つづしん

No.109

今、子どもと学校は



10月18日、5・6時間目
学習発表会の練習をした。
練習が始まった。
ひろみちゃんが、
「お待たせしました。」
と言って始まった。
きんちようしたけど、
（がんばろう。）
と、心の中で思った。
自分の言う言葉を言って、
いい調子だ。
そうして、
「監視カメラに、お前が隠れて読書なん
て罪悪を犯しているところが、ぼっ
ちり映っているんだぜ。」
のところ、たくさん言葉がつまりた
から、ちよつとはずかしかった。
そうして、そこが終わって、
他のところはつまりたりしたけど、

うまくやれたからうれしかった。
「うまくできたなあ。」
と思っただ。
水曜日にもう、一回通しの練習があった。
そうして、始まった。
「次は、つかからないようにがんばる
ぞ。」
と、心の中でずっと言っていた。
そうして、その部分を言ったら
止まらないように言えたから、
うれしかった。
後は、そのままやって、
止まらないように言えてとてもうれし
かった。
児童公開は、27日だから、
その前に、言葉やふり付けを完ぺきにし
たい。

子どもの風景 第8回

練習

太（小6）

目次 2022年12月

子どもの風景（第8回）	1
特集 今、子どもと学校は 安心して過ごせる教室にしたい	宝井 江 2
いろいろな子どもがいるから学べる、 そして支え合う学級をつくりたい	柗 圭一朗 7
青年教師の苦悩と努力	佐々木大介 12
子どもの生きづらさの背景と学校的苦悩	数見 隆生 14
わたしの出会った先生 38	制野 俊弘 16
授業への招待⑧ 東日本大震災の学習プラン～6年生編～	加藤 正伸 18
子どもと学校 教員のやりがいとは？	森 峻平 20
読者の声	21
おすすめ映画	小林みゆき 22
読書のすすめ（第10回）	久保 健 22
相談センター報告（第29回）	遠藤理香子 23
ひと言	春日 辰夫 24
子どもの風景 作品について	堀籠智加枝 24
センターの動き・編集後記	24

特集

今、子どもと学校は

「今、子どもがたいへんだ」という声があちこちの学校から聞こえてきます。「困った子」は「困っている子」です。課題を抱えた子どもたちに私たちは、どう向き合っていくのか。学校現場からの実践とその背景を考え合います。

安心して過ごさせる教室にしたい

子どもと保護者に寄り添って

宝井 江

はじめに

クラス替えをして、持ち上がりの2年生。男子19名、女子15名の34名+交流学級2名。家庭での親子関係に不安を抱えている子や、発達に課題があるため早めに専門機関に繋がりたい子、いわゆる「問題」行動のある子が多く在籍する学級を受け持つことになった。いろんな子がいることが当たり前で、その中で学んでいくことのおもしろさみたいなのを子どもたちなりに受け取ってほしいなと思っている。そして、2年生の1年間を思う存分、楽しんでほしい。自分の思いを言語化することが難しい低学年だからこそ、子どもたちの言葉にならない思いも汲み取り、言葉にして返していくことを積み重ねて、安心して過ごせる教室を目指し、日々試行錯誤しながら実践している。今回は、カナメという男の子を中心に報告する。

(※子どもの名は仮名)

先生！ カナメくんが……

4月、教室へ向かうと真っ先にこの言葉。ほぼ毎日一日中。基本的には、昨年度カナメと同じクラスだった子たちがカナメのよくないと思われる行動をわたしに言いに来た。それを見ていた他の子もまねをするという感じだ。その子たちはカナメに伝えるわけではなく、一番にわたしに言いに来る。

A 「先生、カナメくんがランドセル片付けしないでずっと遊んでる！」

私 「ふーん。まあ朝の会になれば自分でなんとかするんじゃない？」

A 「えー。でもいいの？」

私 「机の上、片付けてなくて困るのってだれ？」

A 「え？ カナメくんかなあ。」

私 「そう。だから、困ったら片付けると思う。今のところ他の人には迷惑かけてないし、まあいいんじゃない？」

B 「先生、カナメくんがずっと机の下で工作してる！」

私 「そっかあ。カナメ工作好きなんだねえ。」

カナメ 「うん！ 大好きだよ！」

私 「もしかして、先生が話してるってことに気付いてないか

もしれない。ね、カナメ？」

カナメ 「……ん？ え？ なんのこと？」

私 「ほら、気付いてないでしょ？ こういうときはカナメに

こっそり教えてあげて。みんなもよろしく！」

先生に何かを言いつけると先生が注意してくれる、叱ってくれ
ると思っていたようだった。いちいちカナメに対する文句や言い
つけを聞くのは正直しんどかったが、そのうちなくなると信じて、
そのうち子どもたちだけでなんとかできるようにしたいと思っ
て、言いつけに来る子どもたちの話を聞くようにした。話を聞いた
後は、「先生に言いに来る前に、本人に伝える」ということを
繰り返し教えた。わたしへの言いつけも減り、授業中など、一人
で遊んでいるカナメに声をかけてくれる子も増えた。

一方、カナメ自身は、授業中は座っているものの、ほぼ手遊び
や工作など関係のないことをしている。友だちとの活動では、自
分の思い通りにならないと機嫌を悪くし、文句を言い続けたり、
奇声を出したりして周りの子たちを困らせていた。行動について
は、「カナメが大きい声で叫んだら他の人はどう思う？」などと
具体的に考えさせ、だめな理由を教えるのと理解できるように、同
じ行動はあまり繰り返したりしない。しかし、遊びや工作をやめ
ることは難しかった。カナメと2人で話して目標を決めたり、そ
の都度声を掛けたりしてもだめなときはだめ。授業中にカナメに

注意すると授業が中断してしまうし、周りの子ども注目してしま
う。なにより疲れる……。どうしたらいいのかぼんやり考えていた。

虫クラブ

カナメは虫が大好きだ。ダンゴムシを連れてきて筆箱に入れ、
一日中うっとりで見ている。休み時間には虫探しに行き、戻って
こない。注意すると「わかった」と返事はするものの、改善は見
られず、どうしようかと思っていた。

(虫に夢中で帰ろうとしなかった日の放課後)

私 「ねえ、カナメさ、そんなに虫好きなんだったら虫クラブ
作れば？」

カナメ 「え！？ 虫クラブ!？」

目を輝かせて食い気味に質問するカナメ。

カナメ 「虫クラブって何するの？ 虫探すの？ 教室で飼ってい
いの？」

私 「うん。誰か誘ってクラブ作るじゃん？ そうしたら、そ
のメンバーで何するか話し合って決めたらいい。」

カナメ 「え！ 好きにしているの？」

私 「うん、もちろん。だって、カナメが作ったクラブだから。」
「でもね、少しだけルールがある。」

カナメ 「なにに？」

私 「入れてって言われたら、その人をクラブに入れてあげる
こと。あとは、クラブは勉強しているときはできない。休
み時間とか学校がおわってからやるんだよ。」

カナメ 「うん、わかった！ 虫は？ どこに置いといたらいい？」

早くやりたくてたまらない様子のカナメ。学級内クラブの用紙
を渡すと、張り切って書いていた。余っているロッカーを虫かご

置き場にして（授業中触らないように）虫クラブは始まった。

次の日の朝、教室は大騒ぎだった。「ねえ、クラブってなに!」「これ書いてもいいの?」大騒ぎする子どもたちの中で、昨年度わたしのクラスで学級内クラブを経験した子たちが一所懸命説明してくれていた。朝のうちにたくさんのクラブが立ち上がり、休み時間にはさっそく活動する子どもたち。カナメの虫クラブにも何人かメンバーが集まったようで、うれしそうに報告してくれた。虫クラブのおかげで授業中に虫に夢中になってしまうことは減った。一時期カナメと揉めていたハヤトも虫クラブに入っていて少し驚いたが、なんかうまくやれているらしい。ダイゴ（知的障害の診断を受けた）は幼虫を見つけるのが得意で大活躍。頭を突き合わせて虫を観察しながらおしゃべりをしている。何度も虫かごをひっくり返し、教室の床はいつも砂まみれだが、「自分たちがやりたいことを楽しむ」「話し合って考えたことを実現させる」ことをとことんやってほしいと思う。

万引き事件とその対応

5月初め、カナメは学校帰りにダイゴを連れてローソンへ行き、コーラとチョコを万引きした。カナメが主導でダイゴに商品を選ばせて万引きし、店の外で飲んだり食べたりしたとのこと。ダイゴのカミングアウトを受け、ダイゴの両親がその日ローソンへ謝りに行き、支払いを済ませていたので学校に連絡はなく、わたしはそんなことがあったなんて全く知らなかった（5月末のダイゴの両親との面談で知った）。

万引きが発覚した次の日、カナメから事情聴取。

私 「校外学習の帰り、ローソンでジュース飲んだり、お菓子食べたりした?」

カナメ 「してない。（しばらく沈黙）……したかも。」

私 「どっちが本当?」

カナメ 「してない。」

私 「してないの?」

カナメ 「うん。」

私 「ダイゴのおうちの人から聞いたよ。ダイゴはお店に謝りに行ったみたい。どっちが本当?」

カナメ 「……（頭を掻きむしる）」

長い長い沈黙

カナメ 「カナメもママに言ったんだけど……下にパンとか置くやつあるじゃん? カナメたちは買った。」

私 「買った?」

カナメ 「いや、買ったじゃない……。」

長い沈黙

カナメ 「下にお金落ちてたから、ダイゴがみつけて……それは一人でやったこと。」

私 「どれが本当?」

カナメ 「カナメが10円落ちてたのを拾った。」

私 「コーラとマーブルチョコって聞いたよ。10円じゃ買えない



い。」

カナメ「(カナメが) ダイゴくんにお店寄ろうって言ってローソ
ンに寄った。」

私 「そのあとは? 中に入ってからは?」

カナメ 「ダイゴくんがチョコ買いたいって言った。」

私 「お金ないから買えないよね? どうしたの?」

また何度も頭を掻きむしるカナメ。またしても長い長い沈黙。

カナメ 「……ママに電話する?」

私 「するね。」

カナメ 「怒られる……。」

「正直に言っても怒られちゃう。」

「ママに叩かれたり、いす投げられたり、だからいやなの!」

泣き出すカナメ。

私 「ママに言わなければいいってこと?」

カナメ 「うん。」

私 「もしかして、悪いことしちゃったってわかってるの?」

うなづくカナメ。

私 「そっか。悪いことか、なんだろうなあ。もしかして、ジュー

スとって飲んじゃった?」

カナメ 「ダイゴくんが飲んだ。蓋を取ったのもダイゴ。お店から

ジュースを取ったのはカナメ。」

ダイゴが蓋を開けたというのは嘘。自分も飲み食いしていたの
を隠し、取ったのはカナメだけど飲み食いしたのはダイゴだから
ダイゴが悪いと言ひ張る。嘘を織り交ぜながら右往左往する話を
ずっとずっと聞いていた。

カナメ 「警察に逮捕されるの?」

私 「うーん。わかんないけど、大人でどろぼうした人は逮捕

されるよね。」

カナメ 「いやだ! 逮捕されたくない! 警察行きたくない!」

カナメは大声で泣き出した。

私 「逮捕されたくないってことは、ローソンからコーラとチョコ

取って食べちゃったんでしょ? 本当はどろぼうしたつ

てこと?」

カナメ 「……うん。」

2時間かかってやっと本当のことを認めたカナメ。悪いことを
したけど、ママにばれたくない、怒られたくない気持ちが強い。
今までの数々の嘘も自分を守るためで、怒られたくないから嘘で
誤魔化している。カナメはどんな育ちをしてきたのだろうと気
になった。

カナメの母と

すぐにカナメの母と面談を行った。電話では何度もやり取りを
していたが、お会いするのは初めてだったが、カナメが生まれて
からのことを隠さずに教えてくれた。

カナメが1歳半のときに離婚し、3歳ちよつとまで2人暮らし。
3歳を過ぎた頃に再婚。新しい父と妹(長女)が生まれたが、出
産後入院。そこで父の実家に入り、父方の祖父母にカナメの面倒
を見てもらうが、連れ子であることが気に入らなかつたのかカナ
メを柱にひもで括り付けるなどひどい扱いを受けた。そこで父の
実家を出て4人で暮らし始める。その後、次女を妊娠。カナメは
赤ちゃんを楽しみにしていたが、祖父から「家に入ってほしい」
と言われ、再度、祖父母との同居が始まる。しかしまた祖母から
「なんで言うこと聞かないんだ」「息子はそうじゃなかった」など
カナメに対する小言を浴びる。耐えきれなくなりアパートを借り、

再び父と5人での生活を始める。カナメが入学すると、今度は父親が子どもたちの前で母を叩くようになった。母は三女を妊娠していたが父と離婚。妹たちが寝ているときは母とカナメの2人で過ごせる時間があつたが、三女が生まれてからその時間もとれない。妹にママを譲ってあげているのかもしれないが、母の方からスキンシップを取ろうとしても甘えてこない。妹たちに意地悪をしたり、けんかをしてみんなが一斉に泣いたりするとどうしていいかわからない。本当に嫌になる。

カナメの幼少期のことや家庭での過ごし方を考えると、今の行動の背景が少し理解できる。母も余裕がなく、とても苦しんでいることもわかった。人を頼ることが難しいのかもしれないと思い、「わたしからもいっぱい電話するかも！お母さんいいかなあ？」と聞くと、「もちろん！話したいです」と言われた。何かあってもなくてもそのままに話そうと約束し、面談を終えた。カナメを理解することと共に母の苦しみもわかりたい。今後も対話の回数を重ねて繋がっていかうと考えた。

蚕とバツタ

蚕が教室にやってきた。虫が好きな子どもが多いので喜ぶかなと思つて他の学年から譲ってもらつたのだ。予想通り食いつく子どもたち。さっそく蚕クラブができ、蚕の世話をしたり、育て方を聞きに行つたり、休日を持ち帰つて世話をしたりと楽しそうに活動していた。教室には蚕のポスターが貼られ、名前募集のアンケートもとられた。蚕クラブの中でカナメとショウが仲良くなつていた。2人は春に作られた虫クラブのメンバーだったが、カナメは誰かと一緒に活動することよりも、どちらかと言えば一人で虫を愛でることが多かった。

ある日の昼休みのあと、カナメは怒つていた。

カナメ「せっかく捕まえたのに！見せたら逃げて取られた。」

「2組の緑の服の人が取つた。カナメが捕まえたバツタなのに！」

落ち着いて話を聞くと、カナメはバツタを捕まえて帽子の中に入れていたが、2組の子に見せてと言われて見せたらバツタが逃げてしまった。そのバツタを2組の緑の服の子が捕まえて持つて行つてしまったらしい。それは怒る。私とカナメは2組に行き、その子からバツタを返してもらつた。

私「よかつたね、返してもらえて。教室戻ろう。」

カナメ「むり！触れない！帽子に入れないとむり！」

はいはいと言いながら、私が教室までバツタを連れて行つた。

私「カナメの虫かごは？」

カナメ「これショウくんにあげるやつ！ショウくん！虫かご

ある？」

「ショウくんのバツタが朝死んじやつて埋めたから、取つてきたの。」

友だちになにかをしてあげるカナメの姿はあまり見たことがなかった。ショウウにあげるために捕まえたバツタだったから取り返したかつたらしい。

自分勝手な行動が多いカナメが、友だちにバツタをあげるなんて……私も子どもたちも驚いた。「カナメいいことするじゃん」とヒロトとアオイ。彼らはものすごく声が大きいので掃除中だった子どもたちも「え！なににに!？」とカナメとショウのところを集まり、バツタを覗いていた。

放課後、カナメの母にこのことを報告すると一緒に喜んでくれた。相変わらず、カナメの母は眠れなかったり、子ども4人の育児で困っていたりと大変なことも多い。これからも、ほんの少し

でもカナメの頑張りやよさを伝えていきたい。子どもたちの話を最後までしっかりと聞きながら、同じように保護者の話もじっくりと聞いて、子どもと保護者に寄り添うことができる担任であり

たいと思う。

(仙台市・小学校)

いろいろな子どもがいるから学べる、 そして支え合う学級をつくりたい

柗 圭一朗

はじめに

課題のある子どもがどのクラスにも当たり前にいる中で、しかも、複数いたときに担任教師だけで対応することには限界があります。また、応援体制が校内に作れるならば、それを頼ることも必要ですが、それが望めない場合もあります。そして、課題のある子どももいずれは社会へと旅立つことを考えたときに、その子ども自身が集団の中で学び育っていけるようにしなければなりません。今、学校の教師たちは、本当に難しい課題に一人で立ち向かっている状況だと思っています。それゆえに、教育条件の整備が本当に急務であると感じています。しかし、毎日子どもたちは、学校に來ています。条件整備を待つてはくれません。そんな中で、課題のある子どもも過ごせる学級集団をどのようにつくろうとしているのか、私のささやかな実践を紹介したいと思います。

課題を抱えた子ども——4年生の頃のタロウさん

4年生の頃、隣のクラスにいたタロウさん(仮名)。いやなこ

とがあつたり、苦手なことを強要されると、キーキーと癇癩を起して、自分の物を壊したり、壁を叩いたりして暴れていたようです。また、アトピーがひどく、痒くて夜はなかなかすつきり眠れず、朝必ず遅刻していました。4年生の9月くらいからは、生活が昼夜逆転してしまい、朝遅く来て、机に突っ伏しては、コンコンと寝ている日々が続きました。ほぼ一日寝ていることも当たり前です。来るだけ偉いとも言えますが、学校に寝に來ているようです。担任とも話をしましたが、無理に起こしイライラさせて他の子に当たるよりは静かに寝ている方がいいと判断しているようでした。そして、そのまま4年生は終わり、5年生になって、私が担任となりました。

5年生でのタロウさん

その時の引き継ぎでは、学習が遅れているということで、算数ではかけ算からの復習を始めました。5年生が終わるまでには、四則計算はできるようにしてあげたいと思っていました。また、極度の潔癖症であることと大きな音が苦手なことも分かりまし

た。それが彼のイライラの大きな原因でもありました。音については、休み時間にクラスで騒ぐ子どもたちに「うるさい」と怒っている彼を見て、休み時間だからなあと困ってしまいました。そのうちに、高い声で騒ぐ男子を嫌って、うるさいと蹴ったこともありました。潔癖症については、4月当初は、周囲の子どもたちも私もあまり認知しておらず、トラブルになりました。タロウさんの前の席の子がタロウさんにプリントを渡そうとして、落とすてしまいました。前の子は当然すぐに拾ってタロウさんの机に乗せようとするのですが、突然タロウさんは怒り出したのです。拾って渡そうとした子どもは、何が起こったのか分かりません。怒りキレルタロウさんを見て、ポカンとしています。その後、だんだんと理由を知っていくのですが、タロウさんは嫌がらせを受けたとしか思っていないのです。

こんなこともありました。休み時間、机の上で定規を飛ばし合う遊びをしていたグループから、突っ伏して寝ている彼の方に定規が飛んでいき、横腹辺りに当たってしまいました。それほど威力はなかったものの、他の子どもたちが触っている汚い定規が体に当たったこと、また、うるさく盛り上がっている集団からそのようなことをされたこともあって、タロウさんは激怒しました。突然教室に備えておいてあったアルコール消毒液を取りに行き、定規を飛ばしたSさんの顔に向かって、吹きかけようとしたのです。間一髪周囲の子どもたちに止められて、大事には至らなかつたのですが、キレると衝動的かつ感情的に行動するところが見られました。でも、落ち着くと、自分の行動について振り返ることができました。また、同じ間違いをしない所があり、そういうところでは知的さを感じる部分もありました。

タロウさんへの働きかけ

そんなタロウさんのことをクラスの子どもたちに理解してほしく、4月から私は何かあると説明をするようにしていました。タロウさんが暴力的な振る舞いをした時は、その行動はよくなかつたとして、どんな思いでそうすることに至ったのか、タロウさんの気持ちを聞き、クラスの子どもたちに聞かせていきました。タロウさんが語れない場合は私がこう考えていたのだろうと代わりに語って聞かせていました。同時にタロウさんの行動についてクラスの子どもたちがどう思うのかも聞くようにしました。それは、タロウさんが自分の行動を客観的に捉えられていない様子が見られ、それがタロウさんの大きな課題だと思ったからです。だからこそ、タロウさんの言動について、クラスの仲間が自由に発言する雰囲気があることは、タロウさんがこの集団で育つために重要だと考えていました。そして、班には、班長と相談して、優しくタロウさんに関われる子どもたちを集めました。タロウさんは班や学習グループで支えられながら自分のペースで学習や掃除、係活動を進めていきました。係活動も掃除も班の仲間とすることにしています。共に活動をすることで仲間意識を育てたからです。

そして、4年生の時には、していなかつた掃除も、理由を聞く雑巾が汚いからということが分かり、ビニール手袋を渡して清掃するように促すと、だんだん取り組むようになりました。また、授業中、寝ていない時は、仲間の説明をよく聞く様子が見られ、仲間の説明について「分かる、分からない」の意思表示を私が求めた場面では、しっかりと意思表示をしていました。例えば、九九があやふやであっても、仲間の説明が分かるか、分からないかは、他の子どもたちと同様に対等であり、授業には参加できるのだと



いうことをタロウさんに教えてもらいました。一方で、彼の中には、学校は、他の子どもたちも含めて、自分に対してストレスや攻撃を与えてくる存在として強く認知していることを彼の言動から感じていました。だからこそ、周囲の子どもたちの心遣いや支えてくれた事実、タロウさんの行動に意見をくれた子どもたちの想いを丁寧に伝えました。何度も繰り返し、「クラスのみんなは、『敵』じゃないよ。『仲間』だよ」と。そのようにして、生活のリズムの崩れから、半日寝る日々が続くこともありつつも1日少なくとも1時間は学習を頑張るようにして5年生が終わりました。

6年生でのタロウさん

4年生から始まったコロナ禍からタロウさんの潔癖症は更にひどくなったとお母さんが話していました。アトピーで荒れてしまっている手にアルコールが沁みて痛みながらも、落ちたプリントや自分の物を消毒する様子を見て、気の毒に思いましたが、そうすることは自分の性格だから仕方ないとタロウさんは話しています。(性格ではないでしょうとツッコみたくなるも、今言っても伝わらないと思って聞いています。また、ある時、学年集会に参加しても絶対おしりをつけて床に座らないタロウさんの姿が目に入りました。45分しゃがんだ

態勢はきつそうでしたが、それでも汚いと思う床にはお尻を下ろさない、そんな場面を見て、タロウさんの生きづらさを何とかしたいと思いました。

机消毒事件

6月上旬、見逃せない場面に遭遇しました。修学旅行のお小遣いの計画プリントをタロウさんが完成させるために、班の仲間が、タロウさんの机につけないようにしながら、空中にプリントを浮かせて見せていました(他の子どものプリントを触るのも、机に付くのもタロウさんが嫌なことを知っているのです)。タロウさんは、その空中に浮いたプリントを見ながら写しています。しかし、持ち続けることの辛さから、一瞬だけ、その仲間の持ったプリントがタロウさんの机に触れてしまったのです。たまたま、見ていた私はどうするのか、じっと見守りました。すると、すかさず、タロウさんは、机の中にあつた自分用のアルコール消毒液のスプレーを出し、プリントが触れた辺りに、アルコールを噴射したのです。プリントを持ってきている仲間の目の前で、です。そして、驚いたことに、それに対して、目の前のプリントを持っていった子どもたちも、そのことには反応せずに、そのまま作業を続けようとしていました。さすがにこれはまずいと、こんなことが日常化してはお互いにとつて良くないと思いました。そこで、クラス全体に声を掛けました。「ちよつと待って。ちよつと聞いてほしいことがあるんだけど、作業を止めてもらえますか」と。そして、まずタロウさんに、「今机の上を消毒したことは、別にプリントが机に付いたからしたことであつて、相手がどう思っているかとかは特に考えていないよね」と確認をしました。すると、タロウさんは、正直に頷きます。そうだろうなと思いつつ、それをされた当事者たちは穏やかではないだろうと思いました。ただ

恐らく当事者は、その心情をタロウさんとの関係から正直には言えないだろうと考え、他の子どもたちに話してもらおうと考えました。そして、「もし今タロウさんがしたことを自分がされたらどう思うか」と聞いてみました。すると、5、6人の手が挙がり、「ショックだ」や「自分がバイ菌扱いされた気持ちになる」「またされると思うと、タロウさんに話しかけたくなくなる」など、タロウさんに受け止めてほしい意見が発表されました。私は、最後に、タロウさんは、悪気はなかったかもしれないが、やっぱりされたらショックに思う人がいてもおかしくはない。せめて、後でこっそり消毒するなど配慮が必要だったと思うと話しました。同時に、この場で意見を出してくれた人は、タロウさんのことを真剣に考えてくれた人だよと付け加えました。タロウさんは静かに話を聞いていました。本当に自分がしたことで相手が傷つくとは思っていなかったのだと思います。その後、消毒するタイミングを少し考えているタロウさんの姿が見られました。タロウさんにとって学校で仲間と学ぶことの意味はこのようにして生まれてくるのだと思いました。お母さんにも、この件について話をし、彼にとつて周囲の人の気持ちを理解することが大事な課題であることを伝えました。そして、潔癖症についても、本人がそれがある程度は克服すべき課題と思うようにしなければ、タロウさんの自立に対して影響が出るのではないかという話もしました。今回の出来事も、私を取り上げたから事件化しただけであって、それ以前もそれ以降も、タロウさんは、仲間に支えられながら穏やかに活動を進め、修学旅行もどこにいるか分からない程、活動班や部屋グループの子どもたちと協力して楽しく過ごしていました。

班の中でのタロウさん

5年生の時には、朝、タロウさんが遅れて教室に入ってくると、

私が声を掛けて、それにつられて、他の子どもたちも挨拶をするといった感じでした。けれども、今は違います。タロウさんが教室に入ってくると、班の子どもたちは授業中にも関わらず声を掛けます。「タロウさん、おはようございます。今日のTシャツは黒でいけていますね」自然に、タロウさんも笑顔になります。タロウさんも、「ありがとうございます。〇〇さんのTシャツも素敵ですね」と返して、机に付き、勉強の準備を進めます。学級の朝のルールとして、班の仲間と一流の挨拶をしようと提起したことをみんな実践しているからです。5年生の時と同様に係活動も掃除も班の仲間とすることになっています。共に活動をする中で仲間意識を育てたいからです。5年生の時から再びやり始めた掃除も今では、当たり前風景となり、雑巾の担当の時は、しっかりとビニール手袋をはめて準備をしています。授業中も、班の子どもたちは、その時のタロウさんの調子を見ながら、声を掛けてくれます。寝ている時は、主に私が声を掛けますが、起きている時は、ほとんど普通に一緒に活動をしています。ふざける仲間の様子を笑いながら見ていることも当たり前になってきました。そして、班替えの時には、班長に「僕が勉強で分からなくて困っていた時に、助けてくれてありがとうございます」と、支えてくれたことにまつすぐに感謝を述べるタロウさんの姿がありました。

最近のタロウさん

そして、卒業まであと半年になりました。朝どんなに遅れても登校していたタロウさんは、最近、学校を休むことが増えてきました。お母さんと話すと、昼夜逆転の生活になっていること、学校に行きたくないと話しているそうです。学校に行くと、ストレスが溜まるというのが理由だそうです。今まではタロウさんが

学校に行くことに難色を示しても、無理やり送り出していただけども、そうはできなくなってきたとも話していました。なるほどと思いつつ、学校に来たくない理由はそうだろうと思えました。「潔癖症」と「大きな音への嫌悪」、そして、「分らない学習」。これらの大きなストレスは周囲の子どもたちとの関係が良好でも、緩和されているわけではないからです。ただ6年生になってノートを取ることも増え、国語の説明文の学習では、それなりの論拠を文章から見つけて、活発に討論へと参加する様子も見られました。今までに比べ、学習に対して意欲的に取り組むようになった一方で、自分のできなさを感ずることもあるようです。ある時、「学習ではみんなと離れてしまっているので、追いつこうとは思わない」と話し、刹那的に自分を諦めている様子も見られます。遅れている学習を部分的にでも取り戻そうと、漢字や音読の家庭学習を勧められているのですが、学校で使ったものを家で使うのは、潔癖症のせいではできないとのこと。学校で使うものと、家で使うものははっきりと分けているそうです。ここでも、潔癖症が学習面で影を落としています。そして、生活面でも影を落とす部分は当然あって、クラスの仲間と関わらせたいのに、タロウさんは仲間に触れることができないのです。友だち同士なら当たり前な肩を組んだり、ちょっとした掛け合ったりすることができず、周囲の子どもたちもそれが分かっているようで、関わりが薄くなっています。言葉の交流だけに限られてしまうのが現状です。

中学校へ向けての課題

タロウさんの学校へ来たくない理由を話してきましたが、もう一つ大きな問題があるように思っています。それは先ほど触れた「友だち」です。思春期は友だちの影響を強く受けながら自分を育てていく時期です。保護者よりも友だちを求める時期とも言え

ます。でも、タロウさんは、支える仲間はいても、心を許して語らう友だち、時には対等にぶつかり合う友だちがいらないように見えます。班での遊びや一年生との交流など組織された活動以外は、一人でいることが多く、時々、休み時間、机に突っ伏して寝たふり？ をしているタロウさんを見てみると、そう思えるのです。今更ながら仲間は育てられても、友だちをつくることはより一層難しいことなのかと思いい知らされます。卒業までに友だちができるようにする、ここへ来て、大きな実践課題が立ち上がってきました。しかし、今後のことを考えると、そう考えざるを得ません。なぜなら、来春入る中学校では学習が更に難しくなることが予想され、また、一層大人の世界であって、ほっておかれることも多くなるのではと考えています。そうになると、中学校ではどうなってしまうのか、不登校にならないかなど、今から心配しています。ただ様々なストレスを抱えていても、友だちがいれば何とか乗り越えていけるのではないかと、そこに微かな希望を持っています。母親とも中学校に向けての話を少しずつしています。せめて「潔癖症」について軽減できないかと専門機関につなぐことを勧めているのですが、忙しいのと学校に来させるだけで手一杯で、なかなか難しそうです。もちろん、中学校には入ってみなければ、どうなるのか、誰にも分かりませんが、心配が杞憂であってほしいと願っています。だからこそ、今は、タロウさんがこのクラスの仲間と生きる日々大きな意味が見出せるように、また、クラスの仲間にとってもタロウさんと過ごした日々大きな意味が感じられるように、あと半年となった小学校生活を、更に豊かな交わりのある濃密な時間にしていこうと考えています。

(仙台市・小学校)

青年教師の苦悩と努力

佐々木 大介

2年間の組合専従を終えて、昨年度現場に戻りました。たった2年の現場ブランクですが、コロナ禍にあったことと、GIGAスクールが入り込んでいたことで、これまでの仕事と同じとは言えない状況にありました。また、青年教師の割合がぐっと増えています。ちょうど35年以上前の40人学級がスタートしたところのようです。その当時（平成元年）初任研がスタートしました。私は40人学級の移行期間で5年生47人の5年生でした。先日、校長と来年度の6年生は35人学級の恩恵を受けないことから学級の人数の話になり、「今では考えられない人数だけど、あの頃は先生が保護者から敬われていたし、家庭訪問では最後の家にしてくれと頼まれお酒と一緒に飲んでいた」という話で盛り上がりました。

さて、タイトルにある青年教師の苦悩と努力について報告します。月末になると机上に出席簿の一覧が印刷され載っています。綴じるだけです。手書きのころは休日を定規で必死に赤線を引いていましたが、学年の若手が全クラスの印刷をしてくれています。昨年度は1年間一度も出席簿に綴じる印刷をしませんでした。直の日誌も同様でいつも印を押すばかりになって机にあります。学年会で方針が決まると、名前シールや教室の掲示物、家庭学習カードや宿題など役割分担などしなくても気付いたことを率先してやっています。授業で使う挿絵の拡大コピーやプリント類についても「やらせていただきます」と全クラス分準備しています。

もちろん、業者への発注や会計処理も的確です。仕事がデジタル化されているのでパソコンに堪能な若手に「ねえねえ、これってどうするの？」と聞くとすぐに「これで大丈夫です」と解決してくれます。出席簿の記入から通信票や指導要録、受験調査書、さらに他校との連絡や街頭指導の出欠までパソコンでできてしまうのは慣れてしまうと非常に効率的です。自分が若手だった頃、先輩の役に立っていたことがあるだろうかと振り返ったとき、飲み会を盛り上げることぐらいしかなかった。今の青年教師の努力と頑張りには、ただただできる人が多いという印象を強く持っています。

では、ただ感心しているだけかというところではなく、危惧していることもあります。それは頑張りの中で見落とされていることがあるのではないかとことです。かつて、職員室ではよく学習教材についての分析や授業の進め方、気になる子どもや学級づくりについての話題が毎日のようにありました。『大造じいさんとがん』の教材分析をどのようにすればいいのか、発問って何？ノートと板書はどのようにする方がいいのか？算数でわからない子どもが出ない授業展開にするためには何に気を付ければいいのか？ 図工の絵や版画を持ち寄り、次にどんな指導をすればいいのか？ 集中しない子どもを引き付ける声掛けはどうするのか？ などのことです。毎日の授業をどうするのか、クラスはどうやってま

とめていくのかわからなかった自分にとって職員室での同僚との対話は、次の日の授業を考えるのに欠かせないことでした。また、「こんな授業するけど見に来ない？」と誘われることもよくありました。校内の研究とは別に、授業についての学びの場が学校にありました。今の学校ではOJT（職場で仕事をしながら行う研修）というをよく言われますが、実際そんな時間はありません。多忙に拍車がかかり、教員の学びの貧困化が進んでいきます。これは青年教師だけに言えるのではなく、ベテラン教師にとっても同様です。目の前の仕事に忙殺されてしまい、とても青年教師に目をかけ、手をかけることができる余裕がありません。自分のことで精いっぱいなのです。

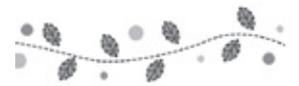
今、学校は、課題を抱える子どもたちがクラスに数人以上いるのが当たり前になっています。加えて、不登校やいじめの問題も看過することはできません。不登校の要因は複雑で簡単に解決できる問題ではありません。担任としてなんとか関わっていかうとしてもそのまま1年間が過ぎてしまうことが多々あります。

いじめの問題は、教師の対応力や学級集団づくりが問われます。子どもたちのトラブルをキャッチしたら、すぐに動き出さないと問題が大きくなるばかりです。いじめにつながる問題を把握したら、該当児童の保護者に「こんな事実がわかったが、聞き取りをしてもよいか」の電話をします。事実関係が把握できたら、「聞き取りをして、こんなことがわかったので指導します」ということを保護者に電話で連絡します。指導後についても保護者に「学校で、このように指導しました」という報告をします。トラブルに関わっている子が複数いれば、その保護者全員に連絡をするようになります。だから職員室の電話は、放課後必ず誰かが使っています。すぐに用件が終わればよいのですが、必ず保護者が納得

してくれるわけではありません。30分以上の電話になることもよくあります。やらなければいけないことではあるのですが、大学卒業したばかりの教師にとって、いやベテランの教師にとっても疲弊するものです。毎日のように続くと、それだけで手いっぱいになり、とても教材研究をして授業に臨むことができない現状があります。

昨年6年生を担当していましたが、いじめの問題は教室の中だけではありません。教室にはいくつものグループラインがあります。それは学年にまたがったのももあります。その中で「あいつ苦手」「だよね」「うざっ」というやり取りがされています。また、SNSに友だちの写真を勝手にアップすることもあります。それを教師が把握することは、教室では見えないことなので非常に困難です。4月頃、コロナ禍の影響を受け、学級内でも友だちと積極的に関わったり、つながったりする活動を避けている印象を受けました。子どもたちは自分たちの要求を出すことも、友だちを巻き込むこともしてはいけないうう雰囲気がありました。学校行事や学年・クラスのイベントも中止にせざるを得ないコロナ禍の中で、そのような過ごし方を学んできたのだと感しています。教室は集団生活を営みながら、いろいろな子どもたちと接し、関わる中で、自分自身も集団としても成長していく場です。その中で、子どもたちがおかしいと思うことや心配なことを担任に話すことのできる関係ができていくことがとても大切だと考えます。普段からいろいろなことを話せる先生には子どもたちは話します。

今年1年生を担当しています。入学前の生活が影響していると思いますが、やはり昨年の6年生同様、いろいろな子に関わろうとする姿は見られませんでした。班や係、学級内クラブの取り組みを始めると、とても喜んで活動しています。また、保護者



についても同じことが言えると思います。久しぶりに実施した4月の学級懇談会には1年生ということもありますが、ほぼ全員が参加しました。子どもたち同様、保護者もつながりを求めていることを実感する懇談でした。

学校は楽しいところ、行きたくなる教室をつくるにはどうすればよいのでしょうか。わかった！ 勉強するのが楽しいという授業

はどうすればできるのでしょうか。元気が出る職員室になるには何をすればよいのでしょうか。

学校以外に学びを求めている青年教師や頑張っている青年教師はたくさんいます。そんな先生たちがやりがいをもって仕事ができるような学校にしていきたいと思っています。

(仙台市・長町小)

特集 「今、子どもと学校は？」を考えるために

子どもの生きづらさ その背景と学校の苦悩

数見隆生

この10月27日、文科省は「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を公表しました。以前は、不登校も「いじめ・暴力行為」と同列視して問題行動扱いしていましたが、近年は批判もあって不登校を別扱いする表現をしています。しかし、新聞等のメディアでは今年も3つを同列に並べ、それらの年間発生件数を示し、無神経にも県別ランキング等で、これらの問題性を報道しています。

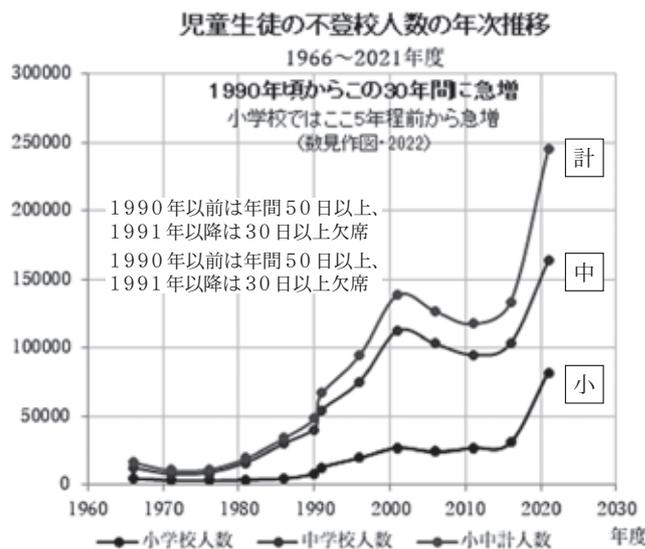
この10月27日、文科省は「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を公表しました。以前は、不登校も「いじめ・暴力行為」と同列視して問題行動扱いしていましたが、近年は批判もあって不登校を別扱いする表現をしています。しかし、新聞等のメディアでは今年も3つを同列に並べ、それらの年間発生件数を示し、無神経にも県別ランキング等で、これらの問題性を報道しています。

ともあれ、先の公表を見て驚いたのは、昨年度(21年度)の子どもの生きづらさの急増

度的一年間で一気に4万5千人急増し全国で25万人近くにもなりました(図)。宮城県や仙台市では、1000人対の割合では全国平均をかなり上回る上昇率となっています。この急増の原因として、当日の新聞には、コロナ禍の影響、オンライン学習で対応、教員の多忙化で見過ごし、等を掲げていましたが、本

です。「不登校・いじめ・荒れ」等は、文科省調査でいう子ども主要因説(無気力・不安)ではなく、その背景こそが問われるべきです。そして、それとの関係で学校の苦悩も課題視すべきでしょう。

数値化された「子どもの問題状況」と その背景について



質はそういうことではないでしょう。また、この調査と同時に毎年行っている文科省の不登校要因調査では、21年度も変わらず50%弱が本人の「無気力・不安」が最大要因としていますが、この問題への研究協力者会議による当事者調査（21年3月・約2千人対象）では学校関連要因を含め他要因が相当ある結果を報告しています。

では、この中学生の90年代の急増と2010年代の小・中急増、とりわけこの21年度の際だった増加要因をどう考えるべきでしょうか。90年代は中曽根政権による臨教審政策による能力主義、2010年前後からの急増は、安倍政権下での教育基本法改変と教育再生実行会議の設置による諸政策の実行（学力主義と多様な人材育成策の具体化）が背景にあると考えます。この小論で詳述はできませんが、戦後教育の初心（全ての子どもの人間的な発達を対等に保障する公教育理念）が崩され、国家の政治・経済的意図に添った「人材づくり」の場・機関に学校が仕立て上げられて来たことが関係していると指摘できるとでしょう。

「子どもの生きづらさ」と

「学校・教員の日常的苦悩」の関係性

確かに、この3年近くは、コロナ禍の影響もあり、学校が十分機能できなかった面があり、子どもらは仲間と楽しく遊び・学ぶ機会や環境が失われ、また教員の教育作用も管理

的にならざるを得ない状況にもなったと思われます。しかし、今日的課題は、そうした一時的に生じた問題ではなく、戦後70余年に貫徹してきた教育政策上の遂行が、子どもたちにとつての「楽しい学びの場」を削り、教員にとつての「人間を育てる生きがいと働きがいの営み」を奪ってきた問題だと考えるので

す。

文科省（関連協力者会議等）は、毎年不登校等子ども「問題行動」データの公表と併せて、「魅力ある学校づくり」「誰一人取り残さない教育」の必要を学校向けに提言していますが、その具体策は示されていません。このことは、これまでの教育政策が、数値による学力競争で子どもたちに格差と分断をもたらし、学校を魅力のないものにしてきたことを暗に物語っていて、具体策を示し得ない状況をも露呈しているのです。

この状況を改善・克服するには、学校と教員にゆとりと余力が生まれ、やりがいのある教育活動を自由に精一杯創出でき、子どもらが学校で仲間と一緒に心を通わせ、遊びや学びを精一杯享受できる場にすることです。そのためには、正規教員をもっと増やすこと、子どもたちが主体的に活動できる教科外教育（学校行事や特別活動、自治的活動、等）の充実（スタンダード化した教科学習でなく、教員の自主的な教材研究を基礎にした創造的な授業実践の可能な状況を生み出す必要があります）。

今、子どもと教員の課題は相互に関連しながら学校の苦悩が増幅しています。「学校とは何か」の根本を問う必要が求められているのです。

おわりに「いま学校をどう問い直し、

地道な実践に繋ぐべきか

こうした社会的背景を背負って、様々な悩みや生きづらさを抱えながら生きている子がたくさんいます。そうした中で、子ども一人ひとりを見逃すことなく寄り添い、子どもとの関係性に配慮し、繋いでいく教育作用を地道に展開している教員も、多忙な中でいることも事実です。また、GIGAスクールとかICT教育といった急激な教育環境の変化の中で、教員層の年代的な不和的環境も生じているということも耳にします。若い年代の教員には、年配層の教員が地道に取り組んできた教育観に基づく教育実践（「実践」概念は単なる取り組みではなく、一定の観に基づく意図的行為であり、その結果としての子どもの成長・発達の事実を生み出す教育作用）にも耳を傾け、年配層には青年教員の意欲や身につけている新しい教育技術にも示唆を得ながら、子どもたちが楽しく学べ、生きる力を協働で導き出す方途を見い出す努力をすべきでしょう。

（本センター運営委員長）

東日本大震災の学習プラン ～6年生編～

加藤正伸

宮城歴史教育者協議会（宮城歴教協）では、「震災を風化させないために、社会科の授業の中で震災を伝えていこう」という目標のもとにプラン作りを取り組んできた。「センターつうしん」104号では、小学校4年生のプランを提案したので、今回は小学校6年生のプランを提案し、みなさんからのご意見をいただきたいと思う。

具体的なプラン作成に当たっては、次の事項に留意した。

① 4年生の「自然災害からくらしを守る」学習を生かしながら、東日本大震災の具体的な状況についてできるだけ当時の町の施設等の被害の様子、地域の人々が置かれた状況が理解できる資料を準備し提示する。それは、学習のための共通の土台作りとしても必要と考える。

② 資料は学習する児童に身近な地域に関するものを準備したい。宮城プランなので、宮城に関する資料を中心としながら、東日本大震災の被災地域の範囲、各地の被害の状況をとりあげ、大規模災害が引き起こす事態を把握できるようにする。その中でも、「フクシマ」の原子力発電所の事故は重点を置いて取り上げたい。他県での実践では、地域の実情を反映したプラン検討が必要になる。

③ 事故による福島の人々が蒙った被害は宮城、岩手とは質が異なる事実、それが福島の人々に与えた被害について考えられるようにしたい。

④ 原子力発電所の事故は、日本では経験したことがない。被災地の復旧、復興を極めて困難な事態に陥れ、現在に至っても解決の方策が確立されていないこと。被害が広域、広範囲に及び、避難範囲も広域、長期間にわたっていることなど、事実を確認する形で学習を進めるようにしたい。

⑤ 狭い日本列島に現在も多くの原子力発電所が存在しており「フクシマ」と同様の事故が絶対起きないと断言もできない。いまや電気を使わない暮らしは成り立たず、停電ともなればその影響は計り知れない。電気を使う暮らしは、原子力発電施設を維持し続ける選択になるのか、その決定権は未来に生きる学習主体である子どもたちにある。決定権を行使するための知識、判断力が不可欠になる。決定判断の基礎になる学びを、「フクシマ」を自分事として考える中で進めたい。

⑥ 過去の災害と被害の事実を知り、将来必ず発生するといわれる次の災害に備えて、どのような知識が必要なのか、国、自治体、それぞれのレベルでどのような施策が必要なのかを考えることができる力



をつけることが求められる。東日本大震災を経験し、その後被災者、自治体、国などによって進められた取り組みの事例を知り、更に必要とされる取り組みをそれぞれ考え話し合い、学習をまとめていく。様々な取り組みは、言うまでもなく一人ひとりの個人の命と暮らしを守る願いと固く結びついているものである。学習では、被災した一人ひとり、住んでいた人々に目を向け考えるようにしたい。

⑦ 4年生の学習プラン作成時に、震災学習に関連する事柄を整理し、各学年で取り上げたい事項について検討した。その話し合いを6年生プラン検討に生かしてきた。様々な問題の総てを取り上げることが当然ながらできない。学習者や、「復旧・復興」の状況などに伴いプランは変わり得る。今回のプランがベストというわけでもない。

原子力発電所の事故が福島「復旧・復興」に及ぼした影響の大きさを避けて、東日本大震災の学習は成り立ちえないこと、震災について学ぶことは、学習する児童自身の未来を考える学習でなければならないと考えプラン作成に取り組んだ。現場実践者の参加がない中での検討会であり、現在の学校現場での実践に耐え得るかが問われるので、プランの一部でも実践してもらえらることを願う。

〈6年 震災復興の願いを実現する政治〉

宮城歴教協プラン（略案）

1 学習の目標

- ① 東日本大震災の復旧・復興の取り組みを調べ、現状と問題点を知る。
- ② 原発事故被害の現状を知り、残された問題が多いことに気付く。
- ③ 震災復興の願いと政治とのかわりを理解する。

2 学習プラン（9時間扱い）【下表】。

（元小学校教員）

時	ねらい	学 習 内 容	留 意 点
1	・ 東日本大震災で起こったことを知る。	①被災前の様子と被災後の写真を比べて被災によって起きたことを話し合う。 ②地震・津波が起きたとき、町の人たちがしていたことを考える。 ③震災の時人々が取った行動やその時の人々の気持ちなどを知る。 ④感想や考えをまとめる。	・ 事前に学習内容を予告しておき、保護者への資料提供や児童からの聞き取りへの協力を依頼しておく。得られた情報を整理しておく。児童にも、できる範囲での資料集めや調べ学習を課題にしておく。 ・ 被災前と比較できる地域の写真、映像などの資料を準備したい。
2	・ 岩手、宮城、福島東北3県の被害状況を知る。 ・ 被災直後の人々の避難所での暮らしの大変さと人々の願いや気持ちを考える	①被害の大きかった宮城、岩手、福島の被害を資料から考える。 ②分かった事、考えたことをまとめる。 ③被災した多くの人々が何日も避難所で生活したことを知り、その大変さを考える。 ④避難所での生活や被災者の願いを考え話し合う。 ⑤復旧・復興の実現について調べることを確認する	・ 流离家屋、死者数など、被害状況をまとめた資料を用意する。 ・ 避難所の様子が分かる写真を準備しておく。学習後、教室に展示しておく。 ・ 避難所生活に関する避難者の声（音声、文字）等を準備しておく。
3	・ 被災地の復旧・復興が災害対策基本法に基づき、国が緊急災害対策本部と各県が連絡を取り合い進められたことを知る。	①避難所生活をする人々の願いを確認し、「復旧・復興」の必要を理解する。 ②災害が起きた時の国の役割（既習事項）を確認する。 ③被災地の復興の様子を知る。	・ 「復旧・復興」の意味を確認する。 ・ 「国の政治の仕組みと選挙」で、国や県、自治体は、国民の命や財産を守り願いを叶える政治を進めると学習したことを思い起こさせる。被災者の願う災害からの復旧、復興は国や県の責任であると確認する。
4	・ 復旧・復興がすすむなかで新しい問題も生まれていることを知る。	①仮設住宅に住み始めた人々の気持ちを考え、新たな問題も生まれていることに気付く。 ②復興の様子について考えたことをまとめ、疑問や気付いたことを話し合う。	・ 仮設住宅に住む人たちにも様々な問題があったこと、地域の復興がなかなか進まなかったことなども、被災者の証言などで気付かせたい。 ・ 宮城県の地震、津波災害の歴史と今後予想されて

4		③地震・津波災害の歴史と今後の予想について知る。	いる日本各地の地震・津波災害の資料を用意する。
5	・震災から命を守るさまざまな「減災」の取り組みを知り、その必要を考える。	①被災者の願いをもとに「減災」施設設置などが進められたことを知り、設置された理由を考える。 ②「減災」の取り組みとその必要について話し合う。 ③考えたことや感想などをまとめ話し合う。	・紹介する各地の施設、活動などに関する多様な資料をできるだけ用意する。被災各県、教職員組合などでも資料を整備している。 ・福島の被害に対する世界の注目を知らせ、次に、福島県の復興の様子について調べることを予告しておく。
6	・原子力発電所の事故が福島の「復旧・復興」に影響を及ぼしていることを知る。 ・原子力発電所の爆発事故の経過とその影響を知る。	①福島県の復興の様子について知っていることを発表する。 ②東北3県の復興の様子の違いを資料で確かめる。 ③浪江町の位置などを知り、震災後と現在の人口の変化を確かめ理由を考える。 ④震災後の浪江町住民の避難先、避難人数を地図で確かめ、多くの住民が各地に散らばって非難した理由を考える。 ⑤10年以上過ぎても住民が戻らず、元の町にならない理由を考える。 ⑥原発事故の経過を知る。 ⑦考えたことや感想をまとめ話し合う。	・震災10年後の宮城、岩手の様子と福島の様子を較べられる写真資料を用意しておく。 ・震災前と現在の浪江町の人口動態表を用意する。 ・人口減少の理由に原子力発電所の事故があったことを知らせ関係資料を提示する。 ・原子力発電所の爆発事故の原因、その対処、その後の放射能汚染等に関する心配などについて、新聞報道等を資料に授業者が簡略に説明する。児童が理解できる範囲の資料を各自に配布するなど、原子力について適切な理解が進むようにする。 ・避難した福島の人たちの声や思いを伝える資料をできるだけ用意しておく。映像資料は、ぜひ用意したい。
7	・震災発生10年後の福島県の復興の様子を知る。	①原発事故後の福島の問題を知り、今後について考える。 ②福島で農業や漁業に取り組む人々が起こした裁判について知り、目に見えない放射性物質汚染問題が長く続いていることに気付く。 ③考えたことを話し合い、自分の考えをまとめる。 ④宮城にも女川原子力発電所があることを知る。	・福島の帰還困難地域の写真や新聞の関連記事など児童の理解を助ける資料をできるだけ用意する。 ・問題は多々あるので、授業者側が問題提起するのではなく、児童から出た考えを切り口にして様々な問題が残されていることに気付けるようにする。
8	・電力問題と関わって、原発の今後の課題を考える。	①福島の原子力発電所事故が世界に影響を与えたことを知る。 ②現在、日本には多くの原子力発電所があることを知り、その利便性と心配点を考える。 ③様々な発電方法があることを知り、それぞれの利点や問題点について考える。 ④考えをまとめ話し合う。	・日本では原発は発電に必要とされ、原発利用を続ける方針とされていることを知らせ、電気の利用は原発問題と切り離せないことに気付かせたい。 ・原子力発電所の所在地を示す日本地図を示し、福島の問題が福島だけのものではないことに気づかせる。
9	・「震災の復旧・復興」「減災」「原子力発電所の事故と福島の現状」「電気を必要とする暮らし」などについて自分の考えをまとめる。	①これまでの学習を振り返り、考えたことや疑問、感想を話し合う。 ②話し合いの内容を含めて自分の考えをまとめる。	・世界各国の原子力利用の動向を分かりやすく提示する。 ・各種の発電方法について図などで分かりやすく示せるように準備しておく。 ・今後の発電方法、電力利用について自分の問題として考えることができるようにしたい。 ・震災の復旧・復興はまだ終わっていないこと、新たな災害への対処は自分たちの問題としてこれからも考え続けなければならないことなどに気付かせるようにしたい。

2021年3月、私は『子どもの言葉が教えてくれる』（新日本出版）という本を出しました。私が出会った教師として3人のことをぜひ記録として残しておきたかったからです。一人は、2017年に亡くなったダンブ園長こと、高田敏幸先生。もう一人が震災で亡くなった大川小学校の佐々木祐一先生。2人とも教師としての生き方を指し示してくれました。

そして、もう一人は私の小学校6年生の担任、佐藤好郎先生です。現在も石巻市旧河南町在住で、本が発刊される直前に私が先生の家を尋ね、発刊後は先生を私の自宅にお招きして当時のあれこれを語り合いました。

私が好郎先生を紹介した理由は2つです。一つ目は、現在では考えられない破天荒な先生だったということ。二つ目は、その破天荒な言動は常に子ども目線、親目線からやむにやまれず行つたものだったということ。

では、どんな破天荒ぶりだったか。私が通っていた旧矢本町立赤井小学校は、入学当時（1972年）のクラスが24名でした。しかし、陸前赤井駅前の開発により大幅に人口が増え、6年生になる頃には45人を超えようとしていました。そして、忘れもしない大事件が起きます。転校生が急激に増え、1学期の途中で1クラス49名に膨れ上がったのです。そこで年度途中にもかかわらず、クラスを二分する案が教育委員

わたしの出会った先生 38

子どもを想う志

制野俊弘



会から提示されたのです。私たちは当然、大反対でした。好郎先生もそんな私たちの様子を見取って、公然と、そして敢然と反対を表明します。私たちの知らない大人の世界の議論でしたが、私たちは親づてに事の経緯を知らされました。

しかし、結局クラスは二分されてしまいます。好郎先生は、この経緯を言葉ではなく、黒板に書き始めました。泣き崩れてしまう自分を予感したのでしよう。堪え切れなくなった先生は黒板に顔をうずめ、嗚咽し始めました。私はあの

しゃっていました。当然、校長や教育委員会から指導が入りました。そして、問題はいいよ町から県の教育委員会へ。私の父親は当時を振り返って、こう語りました。「親たちがみなで県まで押しかけたんだ」と。

しかし、通信簿の書き換えが命じられてしまいます。だから私たちの6年時の通信簿は、黒い文字の評定と赤い文字の評定が並んでいるのです。黒い方は先生が自分の意思でつけたもの、そして赤い方は書き換えを指示されたもの。こんな通信簿は恐らく日本では他に例はないでしょう。私たちの脳裏に「赤い通信簿」事件として深く深く刻まれました。

時、初めて大人が嗚咽する姿を見ました。黒板に涙が滴り落ちる光景は今でも忘れられません。もう一つは、「2つの通信簿」事件です。当時の評価は「相対評価」でした。いくら成績が良くても「標準分布曲線」に子どもたちをあてはめていくため、頑張りや能力が正当に評価されませんでした。この問題に正面から挑んだのが好郎先生でした。何とルールを無視して私たちの評定をつけたのです。後に「あんな曲線に子どもをあてはめるなんてナンセンス」とおっ

常。常には子どもの味方だった好郎先生。最後は校長として自分の信念を貫いて退職されました。数年前、当時の教え子たちで同級会を開催しました。77歳だった先生は、まだ750ccのバイクを操っていました。そこで私たちは真新しいバイクスーツをプレゼントしました。「高速のサービスエリアでヘルメットを取ると、周りが驚くんだよ。はっはっはっ……」

「先生の子どもを想う志は静かに引き継がれている」と言いたいところですが、果たしてどうでしょうか。子どもを想うということは、常に何かとたたかうということですから。

（和光大学・前石巻市中学校教員）

教員のやりがいとは？

森 峻 平

最近私が寂しいと感じていることは、「先生になりたい」という子どもたちが減ってきているということである。子どもたちが

将来的夢として描く職業は、子どもたちにとって身近なものであることが多い。だから、YouTubeを見ている機会の多い子どもたちは「ユーチューバー」を目指すし、お父さんが消防士をやっていたら、「消防士」を目指したいと思う。

教員が子どもたちの限界を決める

ある先輩教員と出会った時に、「〇〇先生と組んで良かった。〇〇先生は本当に最後まであきらめない先生だった」と言っていた。それは、学習発表会の劇の指導だった。

では、毎日のように接している教員になりたいと思わないのはなぜなのか。それは、子どもたちにとって単純に魅力的ではないだろう。労働時間の長さや業務の多さで、子どもたちの前で疲弊する姿を見せ、暗い顔をしているのではないだろうか。

また、教員の大変さは経験しないと分からない。そのため、実際に経験すると、その大変さに気付く、この苦しみを子どもたちに味わってほしくないと思いついて、「教員はなるものじゃないよ」と子どもたちに伝えてしまう。でも、本当にそれでよいのだろうか。教員はそんなに魅力のない職業なの

だろうか。子どもたちが減ってきているという状況は、私はこの仕事に魅力を感じていないし、やりがいも感じている。では、私がこの仕事に感じている魅力とは何なのか少し考えてみた。

今ではない。100点は本番に発揮するものだ」ということを伝え続けていることである。

考えてみれば、子どもたちのよき、限界というのとは一番近くで見ている担任が一番知っている。その担任が、「まだやれる！」と思つて信じているのだから、子どもたちはその期待に応えたいと思うのではないだろうか。

そう思つた私は、運動会、学習発表会、卒業式など、大きな行事の度に、この気持ちを大切に指導している。子どもたちは、必ずその期待に応えてくれる。本番が終わつた時に「100点満点！ よかつたよ！」と心から褒めてあげれば、子どもたちは本当によい笑顔を見せてくれる。その時、教員として達成感を感じるし、幸福感も感じることができる。

ただ、同時に考えるのは、子どもたちは教員の指導力以上の力は発揮できないということである。子どもたちが100の力を持つていたとしても、教員が10の指導力しか持つていなければ、子どもたちは10の力しか発揮できない。私たちの指導力というのは子どもたちにとつてとても大きな影響を及ぼすものだと感じる。

そのため、私たち教員は学び続けなくてはいけない。学び続けることで経験値がたまり、レベルアップすることができる。学び方は様々である。学習会に参加してもよいし、本を読んでもよいし、テレビを見てもよい。

これは、ある意味「カケ」でもあると思う。その時に掛ける言葉によつては、子どもたちのモチベーションが前日に下がってしまう。ただ、大切なのは、「君たちの限界は

私は、この仕事のよさは、「どんな経験でも生かせる」ということだと思っている。テレビでお笑い番組を見ていても、芸人さんから授業中の話術を学ぶことができる。マラソン大会に出場すると、マラソンの苦しさ分かり、体育の時の声掛けが変わってくる。近所の人に会って挨拶をした時、声小さくなってしまう経験でさえ、「あー、子どもたちの挨拶の声が小さくなる感覚ってこんな感じか〜……。」と感ずることができる。

「どんな経験でも生かせる」と感じると、プライベートでさえ楽しくなってくる。何をやっても「勉強です！」と言えるのだから。

大きな行事を乗り越えた時の達成感と幸福感、そして、全ての経験が子どもたちのためになるという感覚。これが、教員のやりがいと楽しさの一つではないかと思う。

教育の効果は遅れてやってくる

私は教員になってから15年ほどたっている。15年もたつと、少しずつ教え子が成人を迎えるようになってくる。そんな成長した子どもたちと出会う時、幸せそうな笑顔をしていけば、自分の教育は間違っていないかと思える。

もちろん、子どもたちは大人になるまでに、多くの教員と出会い、仲間と出会い成長していくのだから、私だけの影響でそうなっているのではない。ただ、間違いなく影響をあたえているということも忘れては

いけないことだと思つ。

教育の難しさは、その効果がなかなか見えないところにある。「あれだけやったのに、点数が伸びない……」「どんなに指導・支援しても、子どもたちが変わらない……」「こんな経験は誰しもあると思う。そして、涙が出るほど辛い時もある。

ただ、最近私は、「長い目で見た時に、この子にとつてこの教育は幸せにつながるか」と考えるようにしている。だから、学力テストの点数が低くても気にしない時もあるし、たとえ子どもに嫌われようとも厳しく叱る時もある。

将来目の前の子が幸せになるためには、どのような指導をし、どのような支援をすることが大切なのか日々考える。それがよい方向にいつているのかは、子どもたちの表情を見れば分かる。どんなに正論を子どもたちに伝えたとしても、子どもたちの表情が暗くなっていけば、それは間違つた指導である。子どもたちの笑顔のために何ができるかを考えるのが私たちの仕事だと思つ。

結果がすぐに出なくて辛いこともあるが、根気強く、長い目で見るのが私たちの仕事にとつてとても大切なことである。そうすれば、必ず子どもたちはよい方向に向かってくれる。

ここまでいろいろ書いてきたが、いろんな教員がいてよいと思う。いろんな教員がいろんな形で子どもたちと出会うことで、

子どもたちは健やかに成長していくものである。ただ一つ言いたいのは、教員という仕事も捨てたものではないということである。ぜひ、多くの夢見る仲間がこれからも増えてきてくれるとよいなと思つ。

(村田町・川崎小)

読者の声

80歳を越えて、ここのところ、健康問題や高齢期の過ごし方などに関する本ばかり読んでおりました。そんな折センターつうしんで、子どもたちの詩や先生とのやりとりを読んで、とっても気持ちが明るく、楽しくなりました。そうだ、こんな世界があったのだとなつかしく、またうらやましくなりました。あたたかく子どもの心を受け止め、育てる教育こそ宝ですね。新しい教育に触れることができました。(氏家勝美さん)

クレスコNO.259を併せ読んでの意見!

- ・正規(専任)の教諭に不足が生じています。非常勤職員迄が、組担任に与っている…? 次年度の採用試験に向かっている者が、クラスの子ども世話朝・昼・晩と一日中できるのだろうか? 正職の増を!!
- ・教育費を無償にすべきなのに、なっていない…、子どもにとって保護者の経済力で、教育に差があつてはならないのに。教育費無償化を声高に叫ぼう!! (高橋利昭さん)



おすすめ映画

小林みゆき



原発をとめた裁判長

そして原発をとめる農家たち

2022年

福井地裁裁判長・樋口英明さんは、2014年5月、大飯原発運転3・4号機の差し止めを命じました。地震の加速度を示す「ガル」。大飯原発の耐震設計基準は700ガル。3・11は2933ガル。700ガル以上の地震は20年間で30回も計測。大飯原発は安全であると主張するには、原発の敷地内に限って700ガル以上の地震は来ないと言うのに等しく、科学的ではないという理由です。

それまでの原発訴訟は、難解な技術的訴訟でした。樋口さんは「裁判官は文系、3年で転勤、超多忙」として、「理性と良識があれば、高校生でもわかる論理」で、前述の結論を出しました。住友林業の一般住宅の耐震基準は3406ガル。原発の一般住宅よりもはるかに低い「安全基準」に啞然とします。

映画は農家の実践も紹介します。福島県二本松市の農業近藤恵さんたちは、エゴマやシヤインマスカットを作る農地で太陽光発電を始めます。

原発賛否両論併記をせず、原発廃止のために奮闘する人々を描いた映画の製作は弁護士土河合弘之さん。「映画の効果は？」と質問すると、「見た人がすぐ行動に移す！」と。あなたは何をする？



（福島県立高教組 女性部長）

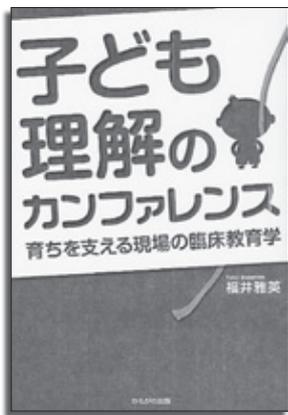


読書のすすめ（第10回）

久保 健

『子ども理解のカンファレンス ー育ちを支える現場の臨床教育学』

福井 雅英 著 かもがわ出版 2009年



学校には、いろいろなことで「こまっている」子どもと「なやんでいる」教師がいる。そうした子どもたちは、教師や仲間の子に対して、罵声をあびせたり、意地悪をしたり、暴力をふるったり、無視したり、緘黙だったり、逃げ出したり……いろいろな「問題」行動をとる。それに直面した時、教師は子どもと接しているその瞬間に待たなしの対応を求められる。また同時に、親にも同僚の教師や管理職にも対応することが求められる。そしてそれらの大人たちもまた、今日の「生きづらい」社会の中でさまざまな困難を抱えていることが多い。しかも今日の学校という社会は、多分に「学校にくる」「言うことをきく」「きちんとする」ことをよしとする「ベキ・ネバ」症候群にとらわれていて、そうさせることができる「指導力のある」教師を求めているくらいがある。

この本の表題である『子ども理解のカンファレンス』がめざすところは、子どもがどうしてそのような「問題」行動をとるのか、その子の内面はどうなっているかを丁寧に探り（子ども理解）、どう言葉をかけ、どう働きかければもつれた「問題」の糸を解きほぐせるか（実践の戦略）を、教師をはじめ、親、教育研究者、医師、支援員、カウンセラー、ケースワーカー、保育士・幼稚園教諭、児相職員など、子どもの発達援助に関わる人々が知恵を持ち寄って探る実践的な営みである。

ここには、その困難の読み解きおよび働きかけの実践例がリアルに示されるとともに、それを踏まえて臨床教育学の理論の構築に向かう幾つかの論者が試みられている。今日の子ども（親）と学校が抱える困難に心を痛め、悩み迷っている心優しい教師に希望と勇気を与える1冊である。

おすすめBOOK



みやぎ教育相談センター相談員 遠藤理香子

あるお母さんの話

我が子が不登校になり、学校やスクールカウンセラー、教育委員会へ相談に行くと、「無理をさせず、少し様子を見ましよう。」と言われて終わった。何度か通ってやっと杜の広場と委託支援団体を教えてもらった。実は他にも支援団体はたくさんあるが、その情報を持っていないので、親はゼロから探さなければならぬ。動き回ってやっと「居場所」に巡り合える家庭もあるが、動けない家庭もある。そんな家庭はどうすればいいのか。子の環境が親の行動力次第で左右されるのは、自己責任を突きつけられているようで、これも一つの格差ではないかと感じる。たとえ「居場所」に巡り合えたとしても、子どもが小学校高学年や中学生なら一人で通うこともできるが、低学年であれば親の送迎が必要になる。ましてや下に兄弟がいる場合、送迎のハードルが高くなり通所を断念せざるを得ない。まず欲しいのは、居住地区近隣にどんな支援団体があるかという情報だ。そこが子に合うか合わないかは自分たちで判断できるし、複数箇所を巡るのも厭われない。とにかく次の一步を踏み出すための情報がないことが、子にとっても親にとっても一番辛い。

「教育の機会確保法」での「情報提供」

この項には「不登校児童生徒に対する支援を行う機関や保護者の会等に関する

情報提供を促すほか、指導要録の出席扱い(略)等の周知を徹底する」とある。また、「国、地方公共団体、教育機会の確保等に関する活動を行う民間団体その他の関係者の相互の密接な連携の下に行われるように」ともある。民間の支援団体の情報は、もっと気軽に提供されても良いのではないかと思う。例えば、市や県の支援事業施設と民間の支援団体を含めた地区別・校種別一覧を用意し相談に活用できたら、本人・保護者はさぞかし心強いのではないだろうか。慎重な対応は必要だが、不登校になっても切れ目なく教育の機会が用意され、自らの進路を考えられる環境を整える方を優先して欲しい。この認識が社会に広がれば、担任が本人や保護者に校外の支援団体を紹介する際のジレンマも解消されるのではないかと考える。学校には通えなくても、誰かどこかで安心して繋がることで、必ずそこには学びや成長がある。不登校だったから知り合えた人・不登校だったから考えたこと・不登校だったからできた体験が貴重な学びであり、それを支えることこそが自立を促すことなのだとか広く周知されれば、情報をもとに次の対策について積極的に考える体制ができるのではないだろうか。

また「指導要録の出席扱い(略)等の周知を徹底する」とあるが、出席認定までの手続きが簡略化されることを願う。現在、家庭からの申請を受けて学校が適応指導センターに届け、センターが聞き取り判断した後、学校長が認定する手続きになっていく。認定されるまでの間、学校の欠席日数にこだわらぬ家庭では、「支援団体へ通所しても出席日数にならないから進学に不利だ」と、依然子どもの不登校を責めるケースもある。「指導要録」に記録する学校と家庭とでは、出席認定の意味合いや切迫感が異なることも考慮して欲しい。

学びはいつからでも

どこでも誰とでも

学校も学校以外の機関や団体も、豊かな人生を送れるようにという願いは共通している。学ぶ機会を確保し提供する方法を、もう少し使い勝手が良いものになってきたら良いと思う。学びは、いつからでも、どこでも、誰とでも始められるものなのだから。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日のをぞき 10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

春日 辰夫（センター運営委員）

学年初め、マコちゃんの記事には「きょうはヤツくんとかふたりであそびました」とだけ書いてあった。考えた末に、「ごくろうさまでした。」とだけ書いて返した。給食中、ノートを持ったマコちゃんが、「こらっ、どうしてこんなことを書いた」と詰め寄ってきた。私は、イヤミが通じたうれしさに笑った。マコちゃんは呆れて自席に戻った。その日の帰りの会。立ち上がったマコちゃんが、「先生は、ほくをバカにしました。先生、どうですか？」と言う。すぐ「ごめんなさい」とわびると、ニコッと笑って腰を下ろした。私は、3年生を大きく誤解していた。読み書きなどに難があっても、「感じる」とは、こんなにも見事にできるのだ。以前、一度だけ3年生を担任した時の自分を思い出し、己の子ども理解の不十分さを恥じた。マコちゃんに心の中で感謝し、彼らとの向き合い方を種々考えた。「朝教室に入ったら声を出して読むように」と、子どもの帰った後の黒板に詩集「きりん」などの詩を書き、しばらく続けたのもその一つだった。

子どもの風景「作品について」……堀籠 智加枝（宮城作文の会）

書いて伝えて、つながっていく。学級の仲間だから読み合える。『書きたいことが2つある』と言って書いた詩。書ききってすっきりした顔で見せてくれた。いつもは飄々としているのに、「間違わないでできるか。」と、ドキドキだったことが分かる。普段は強がっている自分を見せていたんだと思う。読後、一緒にステージに立つ友だちが支えてくれる。そして「うまくやれたから、うれしい。」という思いに共感してくれる。

前回の詩の読み合いで、太君の詩を読んだみんなは、「全肯定」で感想を伝えてくれた。自分のできていないことをそのまま書いた詩。音さんは「真剣に考えているところがいい。いつもは、そういう一面がないように見えてたから。」と言ってくれた。いつもとは違う一面が、文章を通すと見えてくる。それに友だちも気付いて伝える。「友だちの感想を聞いてうれしかったんだ。だから、また伝えようとしているんだ。」と、今回の詩を見て思った。読み合いの良さがここにある。

「上手い文章」ではなくて、「その子の気持ちが表示される文章」を「生きていくために書くべき文章」を書けるようになってほしいと思う。読む方には、それを受け入れる度量をもって、互いに育ってほしいと思う。

センターの動き

〈10月〉

4日（火）こくご講座世話人会

14日（金）第8回事務局会議

22日（土）『教育』を読む会、研究部会

24日（月）ゼミナル Strube（ヴィゴツキー）

29日（土）みやぎ教育のつどい（参加191名）記念講演・堀川修平さん

〈11月〉

12日（土）『教育』を読む会

14日（月）ゼミナル Strube（ボルノ）

25日（金）第9回事務局会議

26日（土）研究部会、国語なやんでるたゝる

27日（日）道徳と教育を考える会（三浦梅園）

〈12月〉

3日（土）「みやぎ教育のつどい」第4回実行委員会、映画『かすかな光へ』上映会

7日（水）第2回運営委員会

8日（木）「モチモチの木」国語教材学習会

17日（土）『教育』を読む会、研究部会、冬のこくご学習会

19日（月）ゼミナル Strube（イリイチ）

20日（火）こくご講座世話人会

23日（金）第10回事務局会議、つうしん109号発送

編集後記

10月27日文科省が昨年度の『児童生徒の問題行動・不登校調査』の結果を発表。宮城県の不登校生は約5千人（内仙台市2千人）で千人当たり30人（全国平均25人）、全国第2位の多さ。「学校に行きたくない」「学校に行けない」子どもたち。今、子どもたちと教師たち、保護者は何に悩み、どんな困難を抱えているのか。この問題を読者の皆さんと考え合いたいと思ひ、本号の特集となりました。実践を寄せていただいた教師たちに共通していることは、課題を持つ子どもたちの姿を見つめ、その声を聴き、その苦悩に共感し、次の発達の課題を見すえ、その子に合った取り組みにチャレンジしていることです。その中で子どもは少しずつ教師に信頼を寄せ、自分を成長させていきます。同時に保護者とも繋がり、保護者の悩みに共感し、子どもへの思い・まなざしを交流し教育の営みを進めています。今、教師たち・学校に、子どもの姿を見つめ、その声を聴き、子ども・保護者と話し合い考える時間が必要です。

宮城歴教協の震災学習プラン第2回、6年生編。福島原発事故も取り上げ、子どもたちとの学習対象にしています。震災11年目、原発事故は今も続いています。ぜひプランに挑戦し、実践報告をお寄せください。（達）

